＜研究論文＞

可能性としてのフットボール
――『万延元年のフットボール』批評へのインターベンション――

芳　賀　浩　一

１．「内と外」の近代

大江健三郎『万延元年のフットボール』[1]は 1967 年 1 月から 7 月まで「群像」に連載され、同年 9 月に講談社より単行本として出版された。発表直後からこの作品に対して様々な評論が書かれ、その流れは現在に至るまで続いている。これまでの先行研究が取り上げた主な論点には「安保」、「観察者」と「行動者」、「本当のこと」、「万延元年」などがあり、それぞれが日本の近代と大江の作家性を考察する豊かな鉱脈となっている。日本の戦後が抱える問題を小説化することに成功した『万延元年のフットボール』は大江を代表する作品となった。しかし、発表当時、作品中で政治的行動者として描かれる鷹四の自虐性が度々否定的な評価を受けるなど、国内の批評家で大江の姿勢を疑問視する声も少なくなかった[2]。そんな中、大江に一貫して共感を寄せ、『万延元年のフットボール』における「万延元年」の意義を海外から高く評価したのが、ミヨシ・マサオである。ミヨシは日本人でありながらカリフォルニア大学バークレー校で英文学教授となった人物であるが、彼の活動は英文学よりも北米における日本研究の分野に大きな影響を与えた。ミヨシの評価が北米において大江評価の道筋をつけ、「世界の大江」が生まれるきっかけの一つになったと思われる。彼は大江が「外」の世界に触れ日本文学がより開かれたものとなることを支援した。『オフセンター』の中でミヨシは大江の『万延元年のフットボール』が安保運動における行動者と傍観者の姿勢を再検討する一方、商業資本の前に消えてゆく村の共同体を記録し、そして「幾層にも積み上げられた真実が正確な意味を求める記述の細部によって限りなく自らを更新しつづける」ことを描いたとして賞賛した[3]。また彼は万延元年遣米使節を考察した著作『我ら見しままに』の終わりに「こうしてみると、今日の旅行者も、万延元年遣米使節の人びとと大差ないのかもしれない。長い歴史からみれば、一世紀にわたる交流も、時間的にはごく短いものなのであろう」[4]と記しているが、これは 1860 年の一揆と 1960 年の安保を重ねた『万延元年のフットボール』における大江の想像力への共感であろう。勝海舟や福沢諭吉らを乗せ、鎖国以来、初めて西洋世界と交流をもつためにアメリカを訪れた万延元年の遣米使節団と、敗戦後の第二の鎖国とも言える状態から回復した 1965 年に生まれて初めてアメリカを訪れた大江が交叉する時点に現れる『万延元年のフットボール』のイメージは極めて魅力的である。

また、万延元年という年は 1868 年から 100 年という節目を祝う意図で企画されていた「明治 100 年祭」へ対抗する歴史観を創造する目的で 1960 年から遡って発見された年でもあった。こうしたことは大江自身が「叛逆ということ」や「同時代のフットボール」等のエッセイにおいて説明している

ことであり、既に多くの研究者によって言及されてもいる[5]。「万延元年」は歴史的事実、その意味、そして様々な解釈が重層的に書き込まれた重い記号になっているのである。

それに対し、『万延元年のフットボール』における「フットボール」が真剣な解釈の対象として考察されたことはあまりない。大江は良くも悪くも自身の小説作品の意図や背景をエッセイや別の小説の中で明かしてしまうことが多く、読者や研究者はそうした大江の発言に読み方を限定されてしまう傾向がある。管見によれば大江がフットボール自体に大きな意味を見いだしていたと考えられる資料はない。「同時代性のフットボール」の末尾で大江が「万延元年の人々によって蹴られたボールが、百年の深淵を飛び越えて、一九六〇年の人々の頭上に落ちる。一九六〇年の人々が蹴りかえすボールは、再び万延元年にむかって飛翔する」[6]と述べていることから推察すれば、フットボールは二つの時代を結びつける媒体と考えられているのであろう。また、「内と外」（万延元年とフットボール）の関係においてフットボールは固有の「内」を生成する普遍的な「外」の役割を担っている。だとすれば、フットボールという外部の媒体=メディアを可視化することで、「内と外」「過去と現在」の重層的歴史性を読み込み「場所と時間」の間に潜む「本当のこと」を探し続けてきた『万延元年のフットボール』批評に新しい、トランスナショナルな視点をもたらすことが可能なのではないだろうか。それは「万延元年」と「フットボール」の間に横たわる「近代」のアポリアを捉え直しつつ、作者の意図を超え、グローバル時代における現代文学としての可能性を「フットボール」に見いだす作業である。

２．小説『万延元年のフットボール』

まずここで『万延元年のフットボール』の顛末を振り返っておきたい。この小説は根所密三郎と彼の弟、根所鷹四の兄弟をめぐって展開する。密三郎はこの小説のナレーターであり、また障害を持って生まれた子供を抱えている点で大江自身を読者に想起させる存在である。一方、鷹四は日米安保条約改定に反対して 1960 年の安保運動に参加した後、その政治的立場を変えてしまうという、1960 年代の学生運動家の挫折を象徴する人物として描かれる。安保運動に参加したことを悔いた彼は劇団員となり、合衆国大統領の訪日を阻止したことへの懺悔の意を示すパフォーマンスに参加するため渡米する。そのアメリカにおいて鷹四は二人の知人と偶然の再会をする。一人は密三郎の親友であり仕事上のパートナーでもある男であったが、不可解な心身の病を抱えた彼は、帰国後に奇怪な姿で自殺することになる。鷹四が再会したもう一人の知人は日本からスーパーマーケットを視察に来た旅行団の中にいた。戦後多くの日本人経営者が新しいビジネスモデルを求めてアメリカを訪れたが、その中に鷹四と同郷の出身で在日朝鮮人のスーパーマーケット経営者がいたのだ。その経営者は鷹四との偶然の出会いを絶好の機会と捉え、百年近く前に建てられた根所家の倉屋敷を買い取りたい旨を申し出る。そして、この申し出が鷹四に故郷で暴動を起こすきっかけを与えることとなる。

鷹四がアメリカから帰国した頃、密三郎と彼の妻、奈津子は危機的状況にあった。彼らの初めての子供が頭部に重度の障害を抱えて生まれてきたのだ。二人は鷹四の強引な説得によって赤ん坊を施設に預けたまま、密三郎の故郷へ旅することになる。実家の根所家は松山に近い四国の小さな村で代々

庄家の役目を担ってきたとされるが、密三郎と鷹四の曾祖父の代の 1860 年、曾祖父の弟は一揆を扇動して根所家を襲い、一族を真っ二つに引き裂いた。1960 年の安保運動に身を投じた鷹四は、彼の曾祖父の弟を強く意識し、一揆のリーダーと自らを同一視していた。鷹四は反乱首謀者たる曾祖父の弟を歴史的事実をもとに神話化しようとするが、密三郎はつねにその話の飛躍と欺瞞を指摘し、鷹四がねつ造しようとする反乱の歴史的正統性をふいにする。兄弟にとって、曾祖父の兄弟がかつて起こした騒動を歴史的にいかに解釈するかは彼らの現在を理解することと密接に結びついている。彼らの自我は常に過去を遡ることによって見出される構成的なものである。鷹四は故郷の村で過去に起こった一揆の騒動の記憶を村の青年たちに喚起するばかりか、そうした記憶を想像によって新たに作りだしてしまう。彼の想像力を村の青年達に伝える場として鷹四はフットボールのチームを組織する。そしてフットボールチームは鷹四の指揮により村の経済を支配していたスーパーマーケットを襲う暴動へと変貌を遂げる。

鷹四は略奪したスーパーマーケットの物品を村人に分配し、暴動の当初の成功は彼を一躍村のヒーローへと祭り上げる。しかし、図らずも 1860 年の一揆の記録はそのような成功が一時的なものであり、一揆の首謀者はいずれ厳罰に処せられることを記述していた。村の少女を強姦、殺害した罪に問われた鷹四は、先祖が辿った破滅の道を自ら進んで引き受けているかのように行動する。鷹四の自暴自棄な振る舞いと先祖の記憶が重なり合い、歴史（history）とストーリー（story）の関係が観察者・蜜三郎と実践者・鷹四の関係として描かれる。そして鷹四の死は最早避けられないものとなる。彼は密三郎に対して自らの罪を認め、更に一層重大な秘密を打ち明ける。今は亡き知恵おくれの妹と近親相姦の関係にあったという事実だ。鷹四が自殺して果てたのち、密三郎は曾祖父の弟が実は処刑されてはおらず、実家の倉屋敷の秘密の地下室に匿われていたことを突き止める。この発見が鷹四の先祖への自己同一化の恣意性を浮かび上がらせ、ヒストリーとストーリー、記録と記憶の関係をより複雑なものにする。歴史的なアレゴリーが鷹四の自分語りを支えていたのだが、生きる自分と過去の関係が常にパフォーマティブであることを体現するエージェントとして鷹四は存在する。一方、密三郎は過去と現在のアレゴリーを解釈することに無限の可能性と喜びを見出すが、妻と子供との関係の中で単なる認識者であることを止め、アフリカで通訳の仕事をする決意をして小説は幕を閉じる。

３．フットボールという視点

ボールを足で蹴る遊びは古代ギリシャやローマの時代から行われ、日本における蹴鞠などを含め世界中に存在したと考えられている。しかし、現代サッカーの直接のルーツと言えるのは 14 世紀までにイングランド各地に広まった民衆フットボールであろう。エリック・ダニングによれば初期の民衆フットボールは「ボールをけるだけでなく、ボールを持ち運んだり、棒で打ったりする。そして、その試合は広々とした田園はもちろん、町の通りのあちこちでも行われた」のである。それはスポーツというより喧嘩に近い代物で、ゴールには村の入り口の門などを用い、「かなり高いレベルの暴力を含むやり方で通例行われた――遊戯的闘争であった。」[7]　フットボールの人気を公式の記録によって確認

できるのは、1314 年にエドワード二世の名で最初に出され、17 世紀まで時の権力者によって何度も発布されることになる「民衆フットボール禁止令」によってである。ダニングらの研究によると、中世の民衆フットボールは贖罪の火曜日に行われることも多く、地域の慣習や宗教と深く結びついた行事であり、中央集権化を指向するイングランドの国民国家形成の初期段階においては悩みの種となる行事だった。そこで 17 世紀から 18 世紀にかけて民衆フットボールの「文化的周縁化」が強力に押し進められた。それと同時にパブリックスクールにおいて成文化されたルールに基づく近代スポーツとしてのサッカーとラグビーが誕生するのである。

イングランドが民衆フットボールを普遍化させる過程とは、すなわち国民国家形成と近代化の過程でもある。中でも 17、8 世紀におこった「囲い込み」（エンクロージャー）は共有地を囲い込んで私有地化することによって農民を土地から切り離し、彼らを産業資本の労働力へと転化させる制度だと考えられた。近年の研究により「囲い込み」自体が状況を劇的に変化させたという説は疑問視されるようになったが、比較的長い時間をかけて進んだイングランドの近代化を象徴する土地改革制度であったことに変わりはない[8]。この大きな近代化へのうねりの中で、そもそも地域の宗教的な祭りであった民衆フットボールが 18 世紀には抗議のための「モッブフットボール」へと変化することになる。中村敏雄はそのような抗議の手段としてフットボールが選ばれた理由について、地域の「祭り」が一時的な社会制約からの自由を意味するものであったために、そうした「伝来の解決方法」を二重の「仮面」として用いたのであろうと考えている[9]。地域の慣習的宗教行事である祭りが近代化の局面において「伝統」という「仮面」をかぶりつつ抗議の意をとなえることになったのである。

４．万延元年とフットボール

この小説のタイトル「万延元年のフットボール」を文字通りに受け取れば 1860 年におけるフットボールの試合ということになろうか。その頃に日本でフットボールが行われたという記録はないことから、この小説全体が歴史的な想像力を問題にしているといえる。また、イングランドにおいてフットボール協会が設立されるのは 1863 年であり、この年をもって近代フットボールが始まったとするならば、万延元年におけるフットボールは世界史的に見ても近代化の完成直前ということになる。この小説で大江は明らかに意図的に日本古来の年号と西洋近代のスポーツを掛け合わせている。幕末期の一揆が前近代におけるフットボールであると想像されると同時に万延元年は安保運動の 100 周年を祝う起源としての 1860 年に翻訳される。大江は相反する言葉を共存させることで言語の異化作用を引き起こし、読者に想像力を用いるように促すわけだが、そもそもこの「フットボール」という言葉は日本人にとって意味があいまいだといえよう。このあいまいさがこの小説の読者に「フットボール」を読み過ごさせ、普遍的メディア化させてしまう一因であり、従って「フットボール」の意味をある程度明確にすることが、固有と普遍（内と外）の間の「異化作用」としての小説のイメージをより具体的に探るひとつの方法であると思われる。

『万延元年のフットボール』における大江の記述からフットボールの競技内容を伺い知ることは困

難である。鷹四に率いられた青年グループが行っている競技がサッカーであるのか、ラグビーであるのか、あるいはアメリカンフットボールであるのか、そのいずれでもないのかを断定することは難しい。「黙り込んだ若者たちが胸苦しいほどにも真剣にボールを蹴っている」、あるいは「転がってきたボールを蹴り返そうとすると、僕の足は殆ど空を蹴り、ボールは激しく錐揉みして土埃りをあげてそこにとどまった」などという描写から、この「フットボール」において手を使っている形跡はなく、従ってここでいう「フットボール」とは「サッカー」のことであろうと推測されるだけである。大江の関心は明らかにフットボールそのものを描写することにはない。重要なのはフットボールというイメージと競技を通じて形成される集団性である。その意味において「民衆フットボール」と「近代サッカー」の間に位置する「フットボール」はエリートスクールにおいて成文化された「サッカー」に比べてより小説の主題にふさわしいと言えるだろう。小説の中で鷹四は村の青年達を訓練するためにフットボールをする。鷹四の目に青年達は「指導者なしでは何ひとつちゃんとしたことをやれない」だけでなく、「悪い状況のなかで自己解放する方向をつかめない」者達であり、それは「かれらはなにひとつ想像しない。かれらは徹底的に想像力が欠けている」からなのである。

しかし、なぜ鷹四はスーパーマーケットを襲撃するための訓練としてスポーツを用いるのだろうか。イングランドにおいてはイートン校、ウェストミンスター校、ハロー校、ラグビー校といったパブリックスクールが「民衆フットボール」を周縁化し、成文化したルールにもとづく近代の「サッカー」や「ラグビー」を生み出した。家督を継がない農家の次男坊や三男坊を吸収した軍隊に対し、スポーツはエリート層によって教育機関を通して発展させられた。日本では 1873 年に築地の海軍兵学寮でイギリス人少尉アーチボルト・ルシアス□ダグラスによって初めてサッカーが日本人に伝えられ、やはり学校の体育教育を通して普及した[10]。やがて地区大会から県大会、全国大会を経て「日本一」を目指すという仕組みに否応なく組み込まれていくスポーツは近代の国家意識の形成と密接に結びついている。よく知られるように、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』はマスメディアと資本が読者に喚起する想像力の産物としての国家像を描いているが、『万延元年のフットボール』において青年達に欠ける「想像力」とは一体なんなのであろうか。

５．近代スポーツの想像力

鷹四は学校の校庭を利用してフットボールの訓練をほどこすことを通して青年達を組織化し、彼らに規律を与えている。小説において万延元年の一揆と対置されるカタカナ語のスポーツの意味を考える上でピエール・ブルデューの分析は示唆的である。

> スポーツを「根性をつくる」手段として見たのは、ヴィクトリア女王時代の古い信仰だったのですが、実はそれより以前に、ゴフマン流の意味での「全面的制度」であったパブリックスクールは、一日二四時間のすべて、一週七日間のすべてにわたって生徒を監督しなければなりませんでしたから、四六時中監督の重荷を負った学校側が、若者たちを最も安上がりで過ごさせる手段をスポーツに見い出したのです。ですから、ある歴史家が書き留めているように、生徒たちがグランド

にいる間こそ、最も監督しやすかったわけです。彼らは「健全な」運動に没頭し、暴力で建物をこわしたり、先生をやじったりする代わりに、その力を自分たちの仲間にむけてくれたからです。

これこそは、疑いもなくスポーツが他にひろまっていった鍵の一つであり、初めはヴォランティアの協力活動を基盤に組織された団体がスポーツの団体となり、それが時代の公権力の承認を得、さらにはその援助を受けて、やがて増殖していった理由の一つなのです。このように、若者たちを動員し、掌握し、コントロールするためのこの極度にまで経済的な手段こそは、大衆の政治的動員または政治的征服を目的の全部または一部として組織された全機関にとって、政治闘争の手段や賭け金として恰好のものだったのです[11]。

ここではスポーツが近代国家における若者の管理技術として発展したと考えられている。この小説において、村の青年達はスーパーマーケットの進出によって職を失うことへの代償として与えられた養鶏の仕事において無残に失敗し、鶏を大量に死なせてしまう。その結果、自暴自棄になった青年達を政治的にまとめ上げるのがフットボールという競技である。肉体を近代的な規律で訓練しながら、鷹四は村の先祖が幕末に起こした一揆の伝説を青年達に語る。それは近代の技術と村の神話が組み合わされた、和魂洋才ともいうべき、近代日本人の自画像である。小説ではそのような想像力が反転させられ、スーパーマーケットへ向けられるのだ。ここで思い出されるのは、「鷹はある日、暴力団に参加して、昨日までの、また明日からの、自分の味方を、さんざん殴ったり蹴ったりしたよ！」という挿話である。この鷹四の暴力性が右や左といった社会的カテゴリーに収まらなかったように、サッカー以前のフットボールという運動自体もまた近代スポーツの政治的枠組みには収まらない両義性を帯びている。近代的な管理術をもって組織される暴動は、近代国家への想像力と同じ構造をもって作られながら、その方向性だけが逆になっているのである。そこで作られる想像力は近代的なルールに則りながら、近代以前の動機に自己同一化するという飛躍を乗り越えなければならない。フットボールという闘争的な肉体の遊技は、それが近代化される以前に存在した「民衆フットボール」というルーツを持っており、更にそれは、「民衆フットボール」という祭りに偽装した抗議の「モッブフットボール」を行うための地域的な共同体意識と闘争心へとつながる。そのような近代化の境を越境するために必要なものこそが、アレゴリカルな想像力であり、フットボールはそのためのエージェントなのであろう。そうした想像力こそが「悪い状況のなかで自己解放」するために必要な力なのである。

一方、密三郎は鷹四が組織するフットボールの練習を「新しい型の念仏踊り」と解釈しており、また同時にそれが練兵場の訓練にならないことを願っている。共同体の情念の昇華であり死者の魂を鎮める宗教的祭り（民衆フットボール）が戦争の代理に転化することを危惧しているのである。「モッブフットボール」が仮面を脱いで「本当のこと」を語ることを恐れているとも解釈できる。ここで密三郎の危惧はほぼ当たっている。鷹四の行うフットボールは青年達を組織し、規律ある暴動を発生させるための訓練だったからだ。安保・フットボールという近代の側から見られた農民一揆・祭りのイメージは過去の回帰であると同時に過去とは断絶されたアポリアとして存在する。アポリアとしての「フットボール」は近代化された伝統という矛盾した形を表現することで一時的に自己解放する手段になるのである。鷹四の組織する「フットボール」には共同体の「民衆フットボール」、抗議のための「モッ

ブフットボール」、そして近代スポーツとしての「サッカー」が共存している。その共存における可能性こそが、政治と宗教の間、1860 年と 1960 年の間、そして内と外の間に想起されるヴァーチャルな存在としての「フットボール」なのである。

６．近代スポーツの再考

近代スポーツからは宗教的な祭りを支えた信仰が後退し、代わりに商業化という新たな文化が介在するようになる。『万延元年のフットボール』の中で鷹四は村の青年達を組織してフットボールの練習に従事させるために彼らに日当を支払っている。ここではスポーツをすることが日雇いの労働をすることの代わりとなり、青年達はいわばプロの運動家となる。更に重要なことは、鷹四が根所家の資産を売り払うことによってその資金を調達していることである。すると彼の暴動自体が村の魂、「根所」をスーパーマーケットに売り払うことによって計画可能になったことになる。土地を離れ、現金経済の中で生きる個人となったところにスポーツという祭りの仮面をかぶった暴動が発生する。これはイングランドの「モッブフットボール」と相似形をなすが、違いは鷹四によるフットボールの訓練が冬休み中の小学校の校庭を使って行われることである。ここにあくまで学校体育として普及したスポーツとしての近代サッカーの側面がある。森を切り開いた空間で訓練をした一揆や町全体をまきこんで行われた「モッブフットボール」ではなく、校庭で規則を身につけ、集団性を獲得する近代スポーツなのである。実際、鷹四は近代のエージェントとして土地を現金化し、青年達にスポーツの規律を浸透させつつ、曾祖父の代の伝統としての一揆を復活させようとする。それは商業化した祭りとしての暴動である。見方を変えれば、スポーツを媒介として表現され可能となった暴動（祭り）は、スーパーマーケットへの抗議という形をとりつつ、村の共同体を近代経済の関係性に組み込むために必要不可欠なイベントとして存在するのではないだろうか。万延元年にフットボールをすることがあり得なかったように、フットボールをすることで農民一揆を蘇らせることもまた、不可能である。ここで、自らの土地と生活を守るために行う農民一揆と鷹四が組織する暴動は根本的に異なる。1965 年に鷹四が引き起こす暴動は父祖伝来の土地と建物をスーパーマーケットのオーナーを介してお金に換え、その資金によって青年達を雇い、同時に過去の一揆にまつわる先祖の話を彼らに浸透させることで実現可能となった[12]。土地の現金化、口承伝説の復活、そして民衆運動を周縁化しつつ成立したスポーツが融合して発生した暴動は、幕末と 1965 年の異同を可視化する、すぐれて近代批評的なイベントなのである。その意味で 1860 年と 1965 年の圧制者に対する正統な反乱という表向きの相似形は二次的な重要性しかもっていないことがわかる。むしろ重要なのは、1860 年と 1965 年が重ねられる事によって現れるズレ、あるいは形だけの相似なのではなかろうか。フットボールは 1860 年と 1965 年（そして 1960 年）をつなぐだけではなく、その切断を象徴してもいる。すると、大江自身が「明治 100 年祭に対抗」するという意図をもって書いた、という説明にも疑問符がつく。彼の対抗する想像力自体が、おそらく大江自身何気なく用いたに違いないフットボールという媒体によって規定されてしまうからだ。スポーツは近代の身体性そのものである。それは、実際の目的がスタイリスティックな肉体

の動きに翻訳され、そもそもの目的が忘れ去られる場（周縁化）として最適な表現なのかもしれない。近代スポーツ選手は、まるでそのゲームそのものに何か本当の目的があるかのように振る舞うのだ。

7．スーパーマーケットと想像力の革命

「フットボール」の役割を考える上で鷹四の言う「想像力」とスーパーマーケットに対する暴動の関係をより深く考察してみる必要があるだろう。スーパーマーケットと呼ばれる形態の店は 1950 年代初めに進駐軍の需要に応えるためにアメリカ式の経営を模倣することから始まり、1960 年代に日本全国に広まった。それと同時に「流通革命」という言葉がダイエーなどのチェーン店とともに全国に普及した。衣類から生鮮食料品までの多様な日用品を一カ所で安価に売るという手法は消費者にこれまでにない便宜を与えるものであった。こうしたスーパーマーケットは買い物客を個人経営の小売店から遠ざけ、複数の仲買人の手を経ずに物品を流通させた代わりに、より多くの地元民を従業員として雇うことになった。スーパーマーケットは地元経済を破壊したというより、その構造を劇的に変えたのである。『万延元年のフットボール』は四国の山村という閉ざされた空間において村民が消費者としてのみならず労働者としてもスーパーマーケットに従属していくさまを写し取っている。既に述べたように、鷹四はアメリカでスーパーマーケットのオーナーから根所家の倉屋敷を買い取りたいという申し出を受け、それによって得られる収入で村の青年を組織し、暴動を起こすことを計画する。裏を返せば、この小説における暴動の成功はスーパーマーケットの隆盛（アメリカ的経営）なくしてはあり得なかったのである。この意味において、鷹四の言う「想像力の革命」とは実は「流通革命」の内面化に過ぎなかったのではないかと考えてみることが可能だ。小説の中で村の青年達は鷹四によって「想像力がまったくない」と侮蔑的に語られる。そして鷹四は彼らにフットボールの練習に参加するために日払いで労賃を与える。鷹四が組織するフットボールチームのメンバーは鷹四の先祖が起こした一揆の逸話に感化され、フットボールチームは徐々に反乱のデモ隊へと組織されてゆく。しかし、幕末の一揆における残虐性とは異なり、鷹四の組織はスーパーマーケットを破壊したりはしない。彼らの行動はむしろスポーツに近い感覚で行われる。規律正しく略奪した品物を村の全員に行き渡らせることで、市場主義に対抗するというスポーツである。そこではむしろ、略奪品を受け取らないという選択肢が否定されている。

流通革命を可能にした物流の力は村経済の構造を変え、古い倉屋敷を先祖伝来の土地から切り離すことを可能にすると同時に倉屋敷にアンティークとしての金銭的価値を与える。そして、その価値（失われた固有性と流通の力）が内面化される時、切り離された空間を埋めるべく、古い祭りの情念と近代スポーツの規律を結びつける新しい想像力が生み出されるのではないだろうか。鷹四が組織したフットボールチームとその後の暴動の経済性は流通革命がもたらした経済性に対応していたと考えられる。そこで青年達はフットボールをプレーしながら新たな領主たるスーパーマーケットに戦いを挑む己を夢想することができるのである[13]。

鷹四は一族にまつわる伝承と近代スポーツを結びつけるという戦略によってスーパーマーケットの

襲撃を組織し、商品を村の人間に分配することで商品を商品ではなくしてしまう。それこそが、流通革命に対抗して行われる想像力の革命の結果なのだが、この作品の重要性は、それにとどまるものではない。「フットボール」という想像力はそれ自身が前近代と近代を含むアンビバレンツ（両義性）である。一揆と祭り、本物と偽物、といった二項を混在させつつ、「万延元年」と重ねられることで更に両義性（東洋と西洋、過去と現在）の輪を広げる。それは、行動者と観察者という近代的に分化した役割を負った鷹四と密三郎によって枠付けされているこの小説の構造自体を無効にしてしまう可能性を孕んでいるといえよう。そうした両義性をもったフットボールのイメージがスーパーマーケットの隆盛に触発されるように想像され、またそのような想像力が「内」と共に「外」をも等価に含むことによって、グローバル化のエージェントとして流通革命がもたらす時空間的な距離の消失（四国の山村の中のアメリカ）を小説の主題として表現するに至ったのではないだろうか。内なる「本当のこと」を求め続けてきた「万延元年」批評に今必要なのは、フットボール・グローバル（から）の批評ではないか。最後に、我々が『万延元年のフットボール』をそのような 21 世紀の課題を射程に収めた現代小説として読むことが出来ることを示しておきたい。

８．脱領土化とヴァーチャルフットボール

『万延元年のフットボール』を「万延元年」から読むことはミヨシをはじめとする評者に日本の開国と近代化の問題を想起させたが、ミヨシと並んで『万延元年のフットボール』における「万延元年」と「1960 年」のアレゴリーに現れる歴史の固有性を高く評価したのが柄谷行人である。

> 「一九六〇年」という特定の時点は、「万延元年」（一八六〇年）と重ねられ、また「一九四五年」と重ねられることで、その特定性（固有性）を奪われる。いいかえれば、大江は特定の時点（個体）を指示する記号としての固有名を排除する。この結果、政治闘争は、フットボールのごときゲームとして、あるいは祭りやカーニバルとして見えてくる。しかし、このアレゴリー的転移のなかに、けっして解消されてしまうことのない固有の地点がある。一回的な、特異的な「歴史」がある[14]。

1860 年と 1960 年の間のずれにこそ歴史の本質があるという柄谷の読みは脱構築理論を自家薬籠中のものとし、日本のポストモダン批評をリードした彼の真骨頂ともいえる。しかし、本稿は「近代文学の終焉」後の文学批評として、あえて「フットボールのごときゲーム」に注目したい。アレゴリーの転移の中に解消されないのは「万延元年」や「一九六〇年」だけではない。「フットボール」もまたしかりなのである。ここで扱う「フットボール」は本来「ゲーム」などではなく、また、普遍化された西洋（ゲームとしてのフットボール）を固有性の対立項と見るのは近代に特有の現象なのである。

カタカナ語の「フットボール」は「日本」にとって自明の歴史性をいったん異化してみせることで、新たな固有性のイメージ（近代ロマンチズム）を作り出す装置として働いた。更に、1860 年に日本でフットボールを行うということがフィクションであることも重要だ。それは異化作用によって表現される固有性がフィクションであることを図らずも明らかにしている。ここでは咸臨丸が渡米した年に

起こった万延元年の農民一揆と鷹四がアメリカから帰国して起こした暴動が重ねられるわけだが、そこで等価に付されるのは一揆とフットボールである。イングランドにおいて発展したスポーツのシステムが日本の一地方における一揆の現代版を名指す言葉として作用することにより、「フットボール」は歴史や固有性がなかったかのような、ゲームとしての記号になる。ここに欠けているのは、フットボールが一揆だった可能性である。このような視座を持ったとき初めて『万延元年のフットボール』には複数の時間と場所が書き込まれ、「前近代の日本」が「固有性」とはまったく別な形で示されることになる。言い換えれば、この小説では伝統的な祭りと伝説的な一揆が「フットボール」という言葉で表されることによって、「脱領土化」するのである[15]。この脱領土化を固有性の喪失と見るのは、近代化を受け入れた側（日本）からの一方的な現象である。他方、ジョン・トムリンソンは著書の中で固有の西洋文化が他の地域で一般化されることを「脱領土化」と呼んでいる。イングランド独自の事情から発展したフットボールがヨーロッパをはじめ世界中で普遍的な競技として行われることで、フットボールからイングランドの固有性が周縁化され、単なるゲームとして享受されるようになる。そこで初めてゲームが「フェア」な近代スポーツとして理解されるようになる。万延元年と 1960 年を結ぶフットボールがヴァーチャルなメディアとなる瞬間である。

スーパーマーケット経済によって村が固有の共同性を失っていく様を描いた『万延元年のフットボール』は脱領土化を主題のひとつとした小説であると言えるが、それはグローバリゼーションの一面にすぎない。フットボールもまた、固有の歴史性を剥ぎ取られ、ゲームとして流通するのだ。それだけではない。産業革命後の世界進出に伴い、世界中の港町から広まったイングランドのフットボールは地球上を伝播する資本主義の波を象徴しているのである。大江がエッセイ「同時代性のフットボール」で表したように、万延元年の一揆が 1960 年と対比されることによって脱領土化されると同時にフットボールからは固有の時間が消去され、代わりに「同時代性」を表すものさしとしてメデイア化される。それはまた、スーパーマーケット経済が日本の隅々にまで浸透してゆく過程の一側面でもある。脱領土化のエージェントである「フットボール」と「スーパーマーケット」によって、『万延元年のフットボール』は固有の場所と時間を離脱することになる。

フランスのメディア学者、ピエール・レヴィは「今、ここ」から離れ複数の空間と時間の中で一時的に現前される現実感を「ヴァーチャル」と表現した[16]。『万延元年のフットボール』において「万延元年」と「フットボール」は固有対普遍という関係性によってパラダイムを形成し、この小説は一般に近代の構造を表現することに成功したと評価されてきた。この近代パラダイムはメディア化された「外の普遍」によって「内」という効果を生み出す。しかし、「フットボール」を歴史化し、固有性が普遍化されるプロセスを読み込むことによって「万延元年」に見いだされる固有性もまた近代パラダイムの力学を一方向から見た場合の一時的な歴史の想像力であることが明らかになる。『万延元年のフットボール』において「万延元年」と「フットボール」が互いに時間と場所を異化することにより、この小説はヴァーチャル性を表現することになる。

９．現代文学へ

『万延元年のフットボール』は「夜明け前の暗闇に眼ざめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする」という文で始まり、「草原で待ち伏せする動物採集隊の通訳責任者たる僕の眼の前に、巨大な鼠色の腹へ「期待」とペンキで書いた像がのしのし歩み出てくると思っているわけではないが、いったんこの仕事を引き受けてみると、ともかくそれは僕にとってひとつの新生活のはじまりだと思える瞬間がある。すくなくともそこで草の家をたてることは容易だ。」と語って幕を閉じる。意識の底の感覚を手探りすることから、像の腹をヒューモラスに想像してみることへ語り手の意識は外在化されている。

この語り手の意識の解放と四国の一山村が脱領土化される過程が重なり、そこにフットボールの歴史が関わってくる。この脱領土化の過程には、特異な固有性の喪失の感覚がつきまとう。ここで注目すべきはレヴィがヴァーチャルを「疎外感から抜け出すための方法」と語っていることである。それはいかにして可能なのであろうか。筆者の理解によれば、ヴァーチャルな表現はこれまで現実を形作ってきた二項対立的なカテゴリーが境界を越えて混じり合うところに生まれる。それは例えば、内と外、固有と普遍、生産者と消費者、作者と読者そして選手と観客などの境界である。『万延元年のフットボール』におけるヴァーチャル性は従来のアイデンティティーにあった「内」の固有性を消滅させつつ、内と外の境を越境するときに得られる両義性を新たなアイデンティティーとして生み出す。アメリカから帰国した鷹四と通訳としてアフリカへ出発する密三郎を通して描かれる村の一時的な変革、それは「フットボール」の越境譚でありアイデンティティーでもある。村の青年がフットボールを通して表現するスーパーマーケットへの反抗は、国境を越えて多義性をもった一時的なつながりを生み、世界市民として登録されつつ新たな土着民としてローカルなアイデンティティーを更新し続ける我々、グローカル人にとっての文学となるのではないだろうか。そして、このような多義性に開かれたテクストをレヴィは「ハイパーテクスト」と呼んでいる。『万延元年のフットボール』というタイトルは二つの（あるいはそれ以上の）異なる固有性に開かれたハイパーテクストとして読むことが可能なのだ。日本とイギリス、アメリカと日本、過去と現在、内と外、が一時的な組み合わせとして、しかも同時に存在するがゆえにヴァーチャル化し、ハイパーテクスト化する。内在と外在は同時に存在するのである。小説の最後で「根所」に建つ倉屋敷はスーパーマーケットのオーナーに売却され、解体、移転される。固有の歴史と神話は脱領土化され、倉屋敷は神的アウラを失う。おそらくその後に読まれるべきものが現代小説としての『万延元年のフットボール』なのである。

10．おわりに

規律と集団的効率を求めて選手と観客が二極分化した近代スポーツに代わり、現代スポーツでは、多様化と個人化、そして選手と観客の融合が特徴となってくる。この小説において、鷹四と密三郎は近代スポーツを特徴づける、する者と見る者、という二項対立を代表しているが、そこに前近代的祭

りがもっていた自己解放が求められるとき、近代スポーツのもつ規則の領土性は再び脱構築され、新たな多様性へと踏みだし、現代化する。アフリカで通訳として働く密三郎は、異なる時空間を一時的につなげるパフォーマンスに身を投じるのであり、一人のフットボールプレーヤーとなるのである。

この『万延元年のフットボール』における「東洋と西洋」、「土着と普遍」という二項対立とその間に生まれるアンビバレンツ(両義性)は近代の構造を語る最も有効な方法のひとつであるに違いない。しかし、そこで固有性を消去されグローバル化したゲームとして普遍化された「フットボール」は、万延元年の一揆を近代のパラダイムにおいて評価するための媒体、つまりこの小説における貨幣として流通する。フットボールを透明な媒体、近代ゲームとして読み過ごしてきた批評は、まさにそれがゆえに近代スポーツ化されているのではないだろうか。「本当のこと」(近代的な深さ＝内在)にとらわれたこの小説の読み方を根本的に変える試みのひとつは普遍化されたフットボールを再固有名詞化することから始まる。それは「同時代のフットボール」で示された大江自身の意図を超えて西洋を具現化し、近代のシステムを長く規定しているオリエンタリズム(普遍－固有の関係)を読み換えることを可能にするのでないだろうか。ハイパーテクストというグローカル時代の文学は複数の特異な歴史性に開かれているがゆえに、表面上はフラットにならざるを得ないが、そこに構造的疎外は入り込む余地が少なくなる。「失われたロマン」としての村人ではなく、アメリカ的経営に侵されつつ、貨幣をねつ造(フットボール)することで一時的に自由を表現する現代人がいるだけである。村の一揆は「民衆フットボール」でも「モッブフットボール」でもなく、ましてや「サッカー」でもない。グローバルな流通革命に触発された想像力が「フットボール」と表現されるとき、そこにスポーツの歴史が浮かび上がってくる。そうした歴史を反転させた鷹四の試みは、過去と現在が反復可能であるかのような現実感に支えられている。それは、フットボールが透明な媒体(貨幣)となることで可能になるのだ。近代の構造が生んだ固有性＝深さの美学が現代の等価性のネットワークに変換される地点をさぐる、そうした読みの可能性を与えてくれる貴重なプログラムとしてこの小説は存在するのではないだろうか。『万延元年のフットボール』というタイトルを虚心に読めば、誰もがフットボールを主題と認めるであろう。

【注】

1 本稿は『万年元年のフットボール』(講談社、1988・4)をテクストとする。

2 上村文人「大江健三郎『万延元年のフットボール』論—絶えざる運動体としてのテクスト—」(『論樹』第 21 号、2008・12)に同様の指摘がある。

3 Miyoshi, Masao　*Off Center*　Cambridge: Harvard UP, 1991. 240～241 頁　引用部分の翻訳は筆者による。

4 ミヨシ・マサオ　飯野正子、高村宏子、篠田左多江、今井輝子訳　『我ら見しままに』(平凡社、1984・3)　246 頁

[5] 安藤始　『大江健三郎の文学』（おうふう、2006・12）、桑原丈和　『大江健三郎論』（三一書房、1997・5）、蘇明仙　「「万延元年のフットボール」　―近代と現代の鎖」　（『比較社会文化研究』第11号、2002）　1～11頁など。

[6] 大江健三郎　「同時性のフットボール」（『持続する志』、講談社、1991・12）

[7] エリック・ダニング　大平章訳『問題としてのスポーツ』（法政大学出版局、 2004・5）　88～89頁

[8] マイケル・ターナー　重富公生訳『エンクロージャー』（慶應通信、1987・1）　93～102頁

[9] 中村敏雄　『オフサイドはなぜ反則か』（平凡社ライブラリー、2001・11）参照。 祭りとしてのフットボールでは仮面をつけてボールをけるということも行われた。

[10] 『サッカー批評』編集部　『ワールドサッカー歴史年表』（株式会社カンゼン、2008・6）

[11] ピエール・ブルデュー　田原音和訳　「人はどのようにしてスポーツを好きになるのか」　（『社会学の社会学』、藤原書店、1991・4）　239～240頁

[12] この暴動が起こった年を特定するのは難しいが、大江がアメリカから帰った年だと仮定すると1965年の冬と考えられる。

[13] 岩井克人はかつて貨幣を模写した視覚芸術と貨幣との関係を考察する過程で、芸術の本質は力の模倣である、という結論に至った。時の権力は本物と偽物を隔てる境界線をひくことで不可視の力を誇示するが、芸術とはそのような境界から逃れる自由を得る手段である、と。岩井克人『二十一世紀の資本主義論』（筑摩書房、2000・3）

[14] 柄谷行人　「大江健三郎のアレゴリー」（『定本　柄谷行人集　5』 岩波書店、2004・7）　120～121頁

[15] ジョン・□トムリンソン 片岡信訳　『グローバリゼーション』（青土社、2000・3）

[16] Levy, Pierre *Becoming Virtual*　Plenum Trade: New York, 1998. 29～30頁　引用部分の翻訳は筆者による。

Football as Possibilities
Intervention in Conventional Criticisms on Ōe's *Silent Cry*

Koichi Haga

Abstract

Kenzaburō Ōe's *Silent Cry* (1967) is one of the works that represent Japan's second Nobel laureate's career and received much critical acclaim. So far the criticism about this work has focused on exploring the "truth" and "hope" mentioned by the characters in the novel or identifying the similarities and differences between the student movements in the 1960s and farmer's uprisings in 1860. In other words, the prevailing criticism has pursued the interiority of the Japanese, and identifying the Japanese characteristics was the implicit goal of analysis in the area of modern Japanese literature.

Unlike previous criticism, this article pays exclusive attention to the role of "football" in this work that has been ignored. I suggest that the "football" is an agent of the modern ambiguity that functions as aporia, signifying both the connection and rupture between 1860 and the 1960s. This "football" is a crucial viewpoint to understand the de-territorializing phenomena of a local village in Japan instigated by the supermarket economy from a transnational perspective. By reinvigorating a historicity in a now globally enjoyed game of football, this article tries to demonstrate a possible analysis of *Silent Cry* beyond the scope of modern literature and demonstrate a reading of his work as a precursor to the literature of the 21st century.